

山中清孝 著

『近世武州名栗村の構造』

我々は、一九八一年、近世武州に関する大きな研究成果を共有できた。即ちここで取り上げる、埼玉県名栗村教育委員会の依頼にもとづき山中清孝氏が執筆された『近世武州名栗村の構造』と、森安彦氏著『幕藩制国家の基礎構造』（吉川弘文館）、大館右喜氏著『幕末社会の基礎構造―武州世直し層の形成―』（埼玉新聞社）である。これらの成果の特徴は、彼らが所属する近世村落史研究会で、一〇数年来、共同で取り組んできた武州世直し一揆研究を中心にとまとめた点にある。同研究会では、一九七一年・七四年に『武州世直し一揆史料（一）』（慶友社）を刊行するなどして、研究のための基礎作業を行ない、これらをもとに研究の成果を機関紙『近世史叢』や、他の学術雑誌に発表してきた。さらに一九七八年には研究会の成果の中間報告を「幕末の社会変動と民衆意識―慶応二年武州世直し一揆の考察―」（『歴史学研究』四五八）と題して行なっている。右の三著は、こうした同研究会の共同研究の成果であり、武州世直し一揆の研究上、相互の

補完する面を有しつつも研究は各人の関心からなされたものであり、いずれも特色ある独立した研究となっている。理想的な共同研究といえよう。

さて、山中氏が執筆された本書の特色は、武州世直し一揆が最初に生じた武州秩父郡上名栗村を素材として、一揆蜂起の歴史的前提を村落構造の変動、殊に世直し一揆の主体勢力、半プロ層の析出過程を明らかにしたものである。同書は一九七〇年に本大学に「近世山村における農民の階層分化過程―武州秩父郡上名栗村の経済構造分析―」と題して提出された卒業論文を基礎にしており、かかる意味では先の三書の中で最も早く骨格が出来あがったものと言える。本書の構成は、次の如くである。

はじめに

序章 名栗村を愛する人のために

総説 名栗村の自然環境とその沿革

第一章 近世の名栗村

第二章 江戸時代の農民生活

第三章 騒動と一揆

第四章 上名栗村の経済構造

第五章 階層分化について

第六章 武州一揆について

「はじめに」によれば、第四―六章が卒論部分に該当し、他は新規に書き加えたものであるという。書きおろし部分は

江戸時代の名栗村の概況や後章の概略である。かかる点、他的一般書とは構成を異にするが、本書は自治体より村民への提供を第一目的としており、新規の部分は本書講読のための導入的役割をはたしている。ここに地方自治体による新たな歴史編纂の一つの方法が提示されたと見ることができよう。

しかし、山中氏の論述の中心が第四～六章にあることは言うまでもない。

第四章「上名栗村の経済構造」は、江戸時代を三期に区分し、殊に生産力の発展、商品流通、農民負担の各視角から分析を加えている。時期区分は、第一期を万治～天明期、第二期を寛政～天保期、第三期を弘化～明治初期の如くされる。また節のタイトルもこれに準じて、例えば第一節は、第一期

(万治～天明期)の経済構造とされ、三節から構成される。節ごとに内容を要約すると、第一節は同期の雑穀、林産物の生産、新田開発の分析から、生産額の上昇は見られない点、

また自然的条件を克服できず飢饉や災害に弱かった点を指摘され、こうした中で領主取奪にさらされていた段階とする。第二節、寛政～天保期の経済構造では農閑渡世の広範な成立、酒造業の成立を明らかにし、これが林産業を背景する点を指摘する。即ち山地利用が炭焼の段階から年賦山分収林制度の導入により積極的な林業が成立し、生産活動の活性化、

分業化が進んだ点に求める。また流通販売の面では、村名主町田氏が江戸浅草へ材木商として進出する点、また役仲間が

町田氏を中心に結成される点を挙げ、産地から江戸へ直結した売込み体制が成立し、これがまた一層の活性化をもたらす、農閑余業をも広範に成立させたとする。なお、他に文化期浅草御蔵への根太木納入権という特権を獲得した点を西川林業の発展へとの関わりで扱っている。弘化～明治初期の経済構造を扱った第三節では前出の諸生産の展開や対外貿易に伴い、生産関係に諸矛盾をきたし、それが貧富差を拡大し、また兵賦金賦課といったような幕藩権力の村民への負担の転化が、権力からの村民離反状況をまねいたとする。

第四章では以上の指摘が多数の図表を利用し、具体的になされており、その手堅さに敬服する。ただ、気にかかったのは章・節のタイトルである。節名には時期区分し、それを利用し、第一期(万治～天明期)の経済構造の如くされる点は前述の通りであるが、まず第一期をなせ右の時期とするのか明らかではない。万治(一六五八～六〇)以前は、どのように理解されるのであろうか。山中氏自身も万治以前を特別に区別できるものと考えているとは思えない、節タイトルは各期の経済段階に照応するようなものが必要であったのではないか。また、枝葉末節を書き並べ恐縮であるが、本章で上名栗村の経済構造と題し、生産力の発展・商品流通・農民負担といったいくつかの問題を採り上げ、それを時期区分して論述する方法をとっているため、展開がかなり複雑になっている。たとえば第三節で氏は論述にあたり「前節で生産構造

の変化にふれ、本節ではそれにつけ加えるものは殆んどない(二二二頁)としている点や、実際三節での記述(第三期)を第二期の展開によって諸矛盾が顕在化する時期と規定しながらも、それについて論述は充分になされず幕末の諸産業を概述しているように思われる。経済構造といった茫漠としたタイトルのもとに種々な問題を記しているため、村々の様子はイメージできるものの相互の関連が不明確となり、氏の意図が十分に伝わらない。論述の工夫が必要であつたらう。

第五章は前章を前提として、農民層分化の実態を明らかにしている。第一節では前章に対応させ、第一期の村落構造を説明している。ここで氏は「名栗村が正徳期におお中世的名体制をなおも存続させていた」(一七二頁)として、持高の変動がなく、譜代下人が多数存在した点から導びきだし、天明期ごろまでかかる体制が存続したと扱えている。しかし中世的名体制が存在するはずもなく、また第四六表(一七三頁)に見られる享保期以降の譜代下人数、家抱数の減少の理由が明らかでない。これらの位置付の上に村落構造を考える必要がある。ただし、石高所持に変化が見られ、両極へ分化し始めるのは氏のいわれる如く、文化期以降のことであった。第二節では文化〜明治初年までの時期を対象に、半プロ層の析出過程・存在形態、その対極にある豪農の経営について非常に手堅く分析されており、氏が最も力を注いだ所といえる。ここで氏は、まず佐々木潤之介氏が「維新変革の現代

的視点」(『歴史学研究』三二二号、一九六七)で提示された豪農・半プロ規定に従い、豪農・半プロの析出を高所持にみられる階層分解、及び質地証文の分析、各家ごとの生業の解明から行ない、貧農が小作人、労働力販売者になっていったことを具体的に明らかにしている。さらに氏は半プロ層の存在形態についても言及する。即ち、奉公人一般の日雇化傾向及び村内における労働力需要の増大を西川林業の発展、豪農形成との関連で捉え、半プロの存在形態を明らかにしている。さらに御用金・救恤の問題を通じて豪農と領主権力、豪農と半プロの関係をより豊かなものとしている。そして、こうした説明の上に、豪農町田家の経営分析を行なう。氏は町田家の関わった諸産業(炭商・材木商・酒造・質屋・筏商・地主など)を明らかにするとともに、年間の収支を示し、町田家が黒字経営をかならずしもしていなかったとする。その一つの原因として小作料の滞納を上げている。弘化期に小作人は一〇〇人余存在するが、その内九〇%余が滞納者である。かかる状況にもかかわらず地主―小作関係が多く結ばれていったのは、滞納者には労働力の提供を求め、その代償としていたことによるとする。土地収積状況からみると天保期ごろまでは上畑・中畑を、それ以降は植林のために下畑・切畑を中心に購入している点が明らかであり、労働力はこうした点からも判明する林業労働に不可欠のものであったのである。本章は、豪農―半プロの関係を単なる予測的なものとし

てではなく、非常に緻密な分析のもとに我々に提示したものと見える。ただ、山中氏が前提とした佐々木の豪農―半プロ規定は、その後佐々木氏自身に規定の変更もあり『世直し』岩波新書、一九七九年）、従来のものとはかなり異なっている。刊行にあたっては、少なくともかかる研究状況に対する山中氏自身の立場を明らかにする必要があったのではなからうか。

第六章は、第四、五章をふまえて武州一揆について述べる。なお、武州一揆に先行する享保九年の新古両組分離、天明期の荒所見分反対の闘争を取り上げているが、武州一揆との関連ではかならずしも把えられておらず、位置づけが不明確な感がある。武州一揆については、当時の経済・社会・政治状況を全国的視野から把え、その上で名栗村の状況を具体的に示している。一揆前後における豪農への日雇の出労状況も解明している。武州一揆における諸階級の対応や経緯については、森安彦氏の前掲に詳しいが、氏も手際良くまとめられている。一揆の意義については、生産関係・流通関係の矛盾の解決をめざしたもの、及び矛盾を顕在化させたものとして理解されており、山中氏が「幕藩制崩壊期における武州世直し一揆の歴史的意義」（一九七四年『歴史学研究大会別冊特集』）で示された武装した改革組合に対する闘争としての側面は、明確にされていない。武州一揆を流通・生産との関係で把えた場合と、武装化したといわれる改革組合の存在もふまえた

一揆の解釈には相当差があつて当然であらう。山中氏の武州一揆の理解が改めて問われるのではないか。また、その問いには、明治維新以降の基礎構造分析を通じ、自由民権運動まで見通した分析が有効であらう。

以上、筆者の力不足から十分な評価もできぬまま紹介してきたが、山中氏の莫大な統計を通した手堅い分析にはただただ敬服するばかりであり、本書に盛り込まれた図表は、研究者に多くのデータを提供したものだといえる。また註も懇切丁寧であり、多くの点を示唆してくれている。これらをもとにした多くの研究を予想させてやまない。

〔附記〕

小稿は高埜利彦先生ゼミ参加者によって、書評を行ない、大友の責任においてまとめたものである。ゼミでの様々な論点を十分に盛り込めなかった点、御寛容を願う。（大友一雄）

（昭和五六年一二月刊、埼玉県人間郡名栗村教育委員会、送料共三八〇〇円）

山中清孝 昭和四六年学習院大学文学部史学科卒業、昭和五一年同大学院人文科学研究科博士課程単位取得、現在 神奈川県立相模原養護学校教諭。